

## 浅間山の火山活動解説資料（令和6年4月）

気象庁地震火山部  
火山監視・警報センター

山体浅部を震源とする火山性地震が、4月中旬以降増加しています。また、2023年11月頃より停滞していた山体の西側での膨張を示すと考えられる傾斜変動が、3月中旬から再び認められています。火山ガス（二酸化硫黄）放出量は、1日あたり500トン前後で推移しており、2023年3月以前に比べて多い状態が続いています。引き続き、山頂火口から概ね2kmの範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。

山頂火口から概ね2kmの範囲では、弾道を描いて飛散する大きな噴石や火砕流に警戒してください。地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

噴火時には、風下側では火山灰だけでなく小さな噴石が風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

令和5年3月23日に火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）を発表しました。その後警報事項に変更はありません。

## ○ 活動概況

## ・ 噴煙など表面現象の状況（図1～2、図3-①、図4-①③）

山頂火口からの噴煙は白色で、噴煙量は少なく、高さは火口縁上600m以下で経過しました。

今期間、火映は観測されませんでした。

10日に陸上自衛隊の協力により実施した上空からの観測では、噴気孔の位置や地形等に変化はみられず、火口底や火口周辺に新たな噴出物の形跡は認められませんでした。赤外熱映像装置による観測では、前回の観測（2023年12月）と比較して地表面温度の分布に特段の変化はなく、火口底中央部の火口付近で引き続き温度の高まりが認められました。また、火口内の西側および北東側でも引き続き温度の高い箇所がみられました。

## ・ 火山ガスの状況（図3-②、図4-②）

1日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は1日あたり1,300トンと多い状態でしたが、その後は300～500トンで推移しました。火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は2023年3月以前に比べて多い状態が続いています。

## ・ 地震や微動の発生状況（図3-③～⑤、図4-④～⑧、図5～6）

山体浅部を震源とする火山性地震が、中旬以降増加しました。13日以降の火山性地震の日回数は22～92回で、増減しながら推移しました。

火山性地震の震源は、主に従来からみられている山頂直下の深さ－1km（海拔1km）付近および山頂のやや西側の深さ0km（海拔0km）に分布しました。

23日に振幅が小さく継続時間の短い火山性微動が1回発生しました。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)

次回の火山活動解説資料（令和6年5月分）は令和6年6月10日に発表する予定です。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、関東地方整備局、国土地理院、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び長野県のデータも利用して作成しています。

資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』『数値地図25000（行政界・海岸線）』を使用しています。

・地殻変動の状況（図3-⑥、図4-⑨⑩、図7～9）

2023年11月頃より停滞していた山体の西側での膨張を示すと考えられる傾斜変動が、3月中旬から再び認められています。

一方、GNSS連続観測では、一部の基線でみられていたわずかな伸びの変化は、2023年11月頃から停滞しており、今期間、特段の変化は認められませんでした。

光波測距観測では、特段の変化は認められませんでした。



図1-1 浅間山 山頂部の噴煙の状況  
追分監視カメラ（4月13日）



図1-2 浅間山 山頂部の噴煙の状況  
鬼押監視カメラ（4月25日）

- ・山頂火口からの噴煙は白色で、噴煙量は少なく、高さは火口縁上600m以下で経過しました。

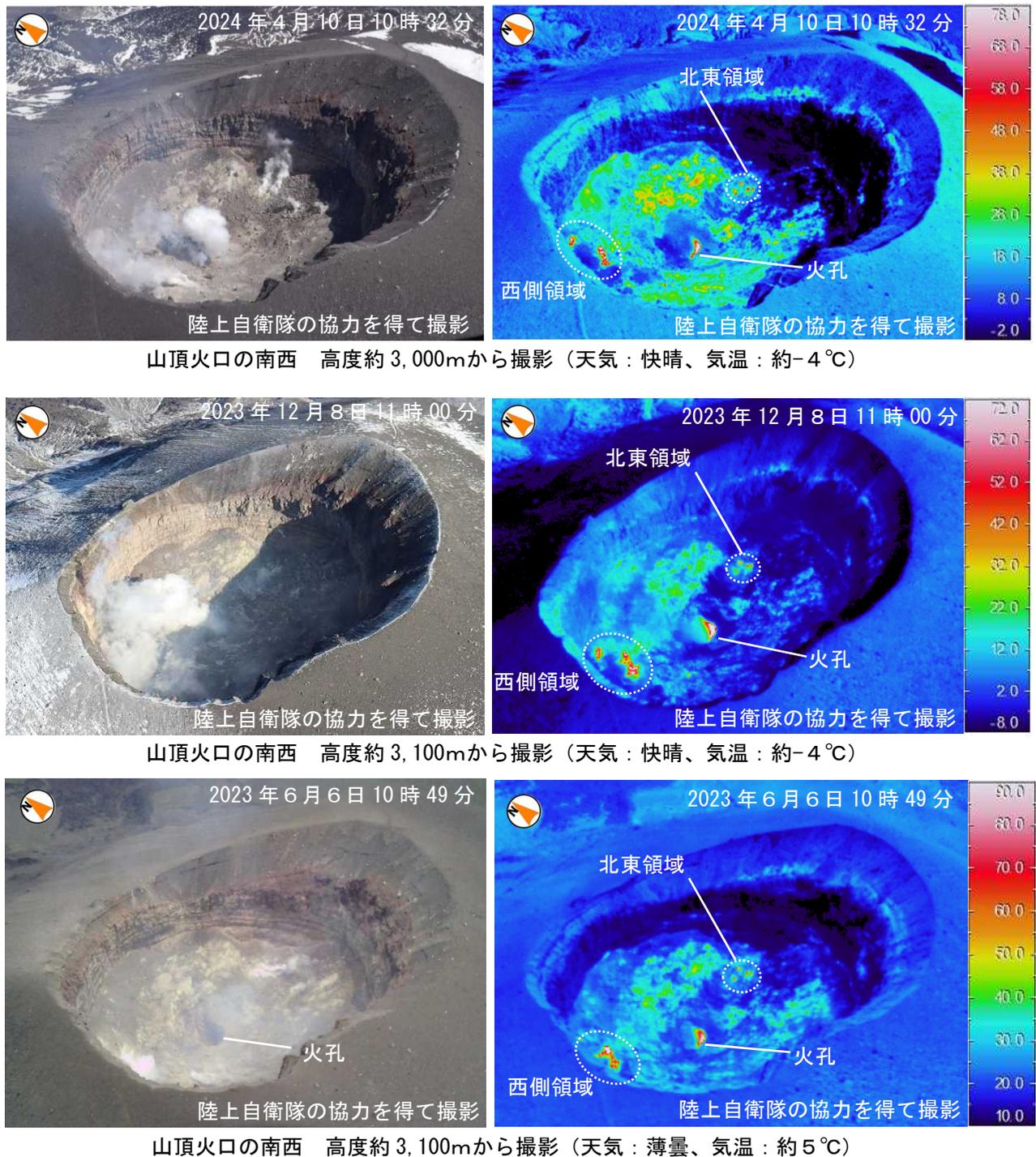


図2 浅間山 火口付近の状況

（上段：2024年4月10日、中段：2023年12月8日、下段：2023年6月6日）

- ・10日に陸上自衛隊の協力により実施した上空からの観測では、噴気孔の位置や地形等に変化はみられず、火口底や火口周辺に新たな噴出物の形跡は認められませんでした。
- ・赤外熱映像装置による観測では、前回の観測（2023年12月）と比較して地表面温度の分布に特段の変化はなく、火口底中央部の火孔付近で引き続き温度の高まりが認められました。また、火口内の西側および北東側でも引き続き温度の高い箇所がみられました。

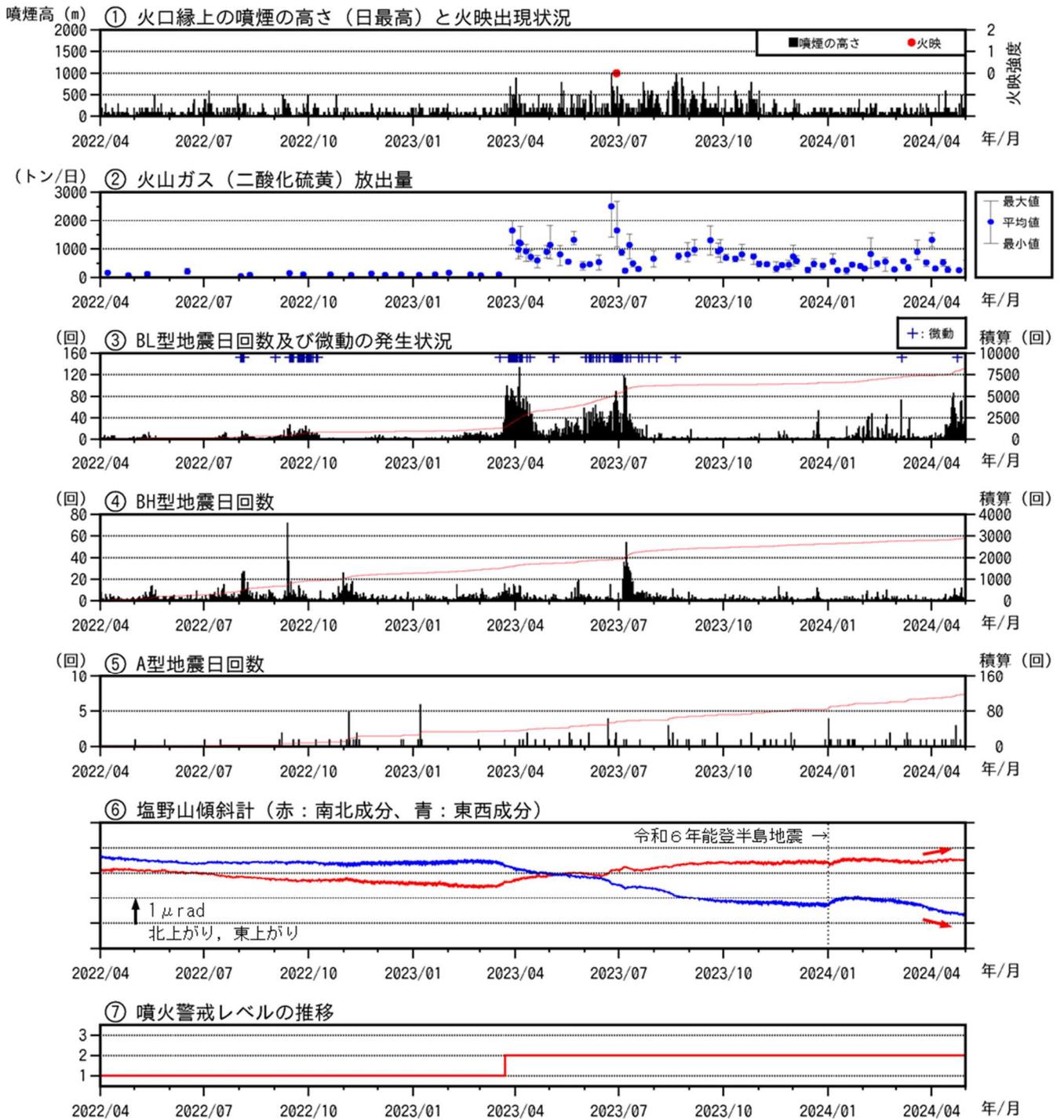


図3 浅間山 短期火山活動経過図（2022年4月1日～2024年4月30日）

- ・ 山頂火口からの噴煙は白色で、噴煙量は少なく、高さは火口縁上600m以下で経過しました（①）。
- ・ 1日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は1日あたり1,300トンと多い状態でしたが、その後は300～500トンで推移しました。火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は2023年3月以前に比べて多い状態が続いています（②）。
- ・ 山体浅部を震源とする火山性地震が、中旬以降増加しました。13日以降の火山性地震の日回数は22～92回で、増減しながら推移しました（③④⑤）。
- ・ 23日に振幅が小さく継続時間の短い火山性微動が1回発生しました（③）。
- ・ 2023年11月頃より停滞していた山体の西側での膨張を示すと考えられる傾斜変動が、3月中旬から再び認められています（⑥赤矢印）。

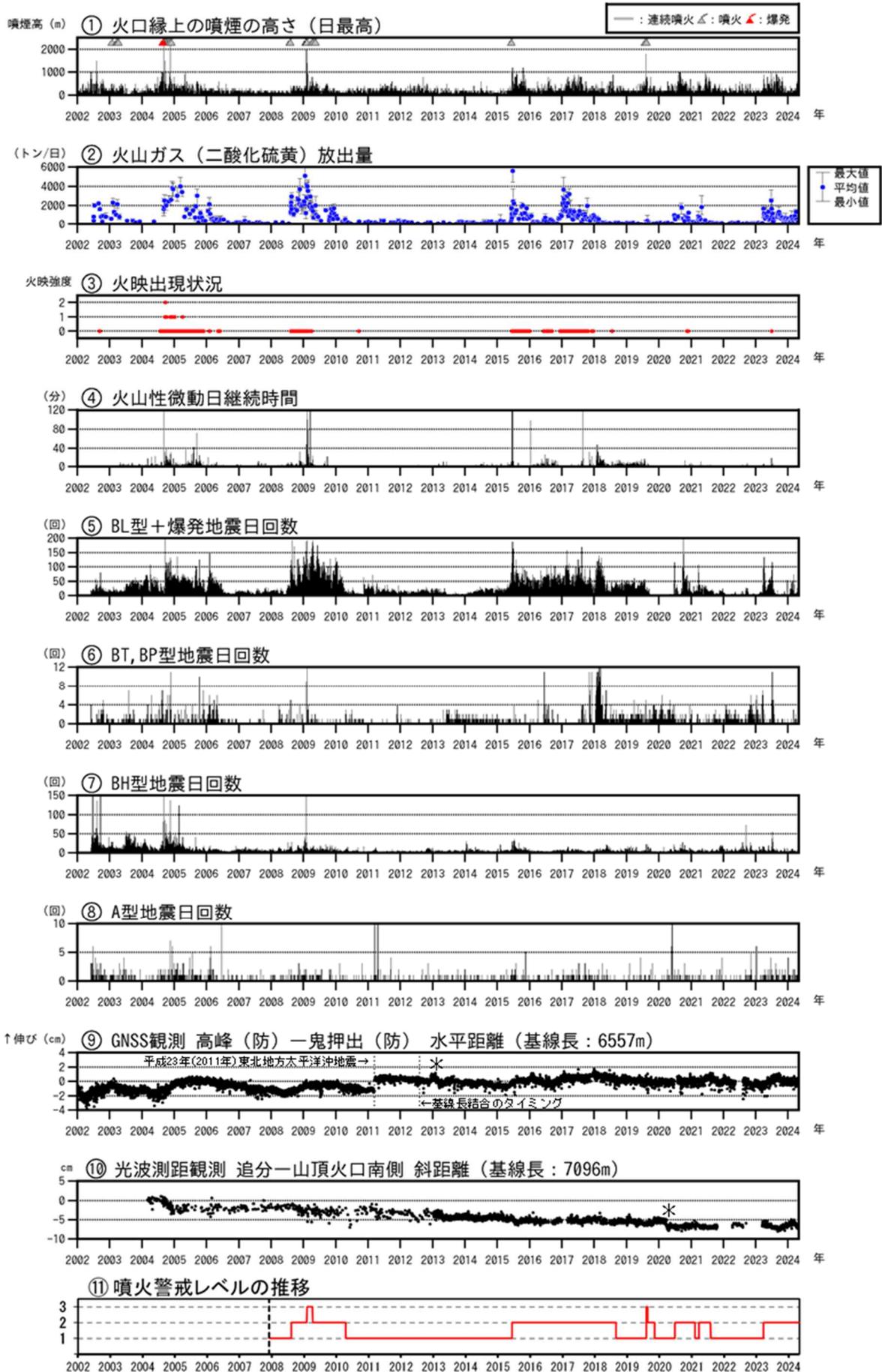


図4 （前ページ）浅間山 長期火山活動経過図（2002年1月1日～2024年4月30日）

- ② 国立研究開発法人産業技術総合研究所及び東京大学による観測結果が含まれています。
- ③ 火映強度については、以下のとおりです。
  - 0：肉眼では確認できず、高感度の監視カメラでのみ確認できる程度
  - 1：肉眼でようやく認められる程度
  - 2：肉眼で明らかに認められる程度
- ④～⑧ 計数基準は石尊観測点で南北成分最大振幅  $0.1\mu\text{m}$  以上、S-P 時間 3 秒以内  
火山性地震の種類は図5のとおりです。
- ⑨ 2012年7月31日まで 気象庁の高峰－鬼押観測点間の基線長（基線長 7417m）  
2012年8月1日以降 高峰(防)－鬼押出(防)観測点間の基線長  
(防)：国立研究開発法人防災科学技術研究所。2010年10月及び2016年1月に解析方法を変更しています。
- ⑨⑩ \*で示す変動の原因は不明ですが、火山活動によるものではないと考えられます。

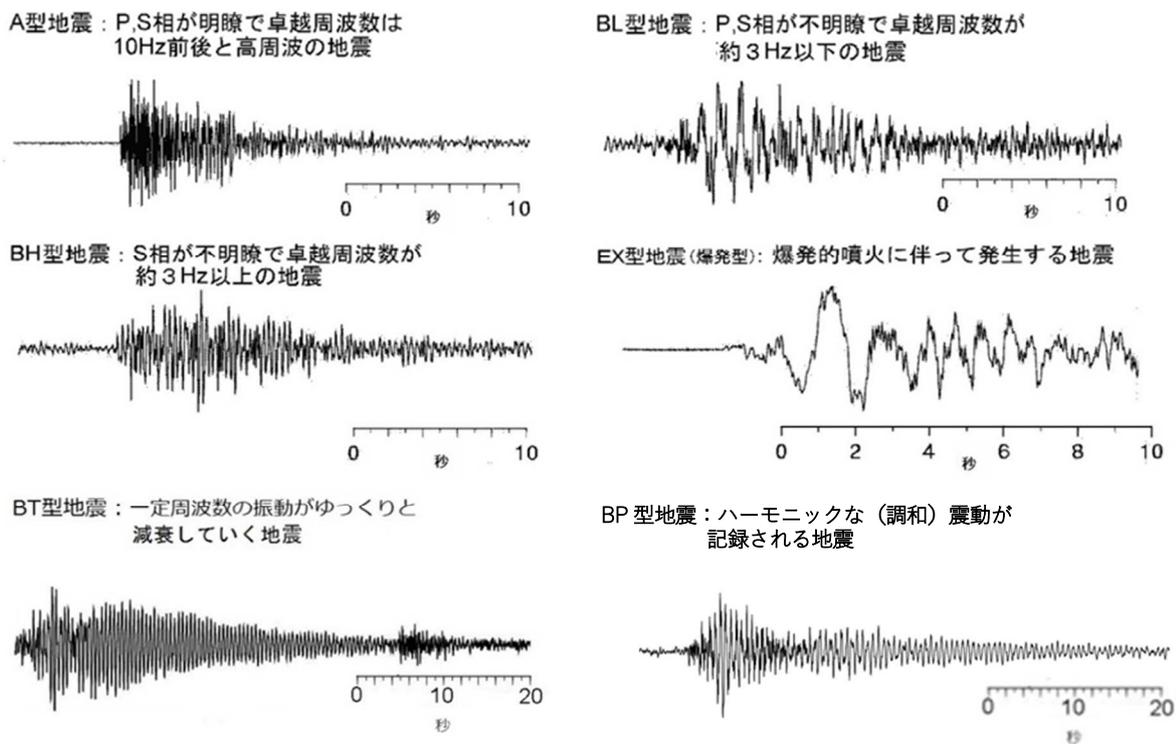


図5 浅間山 主な火山性地震の特徴と波形例

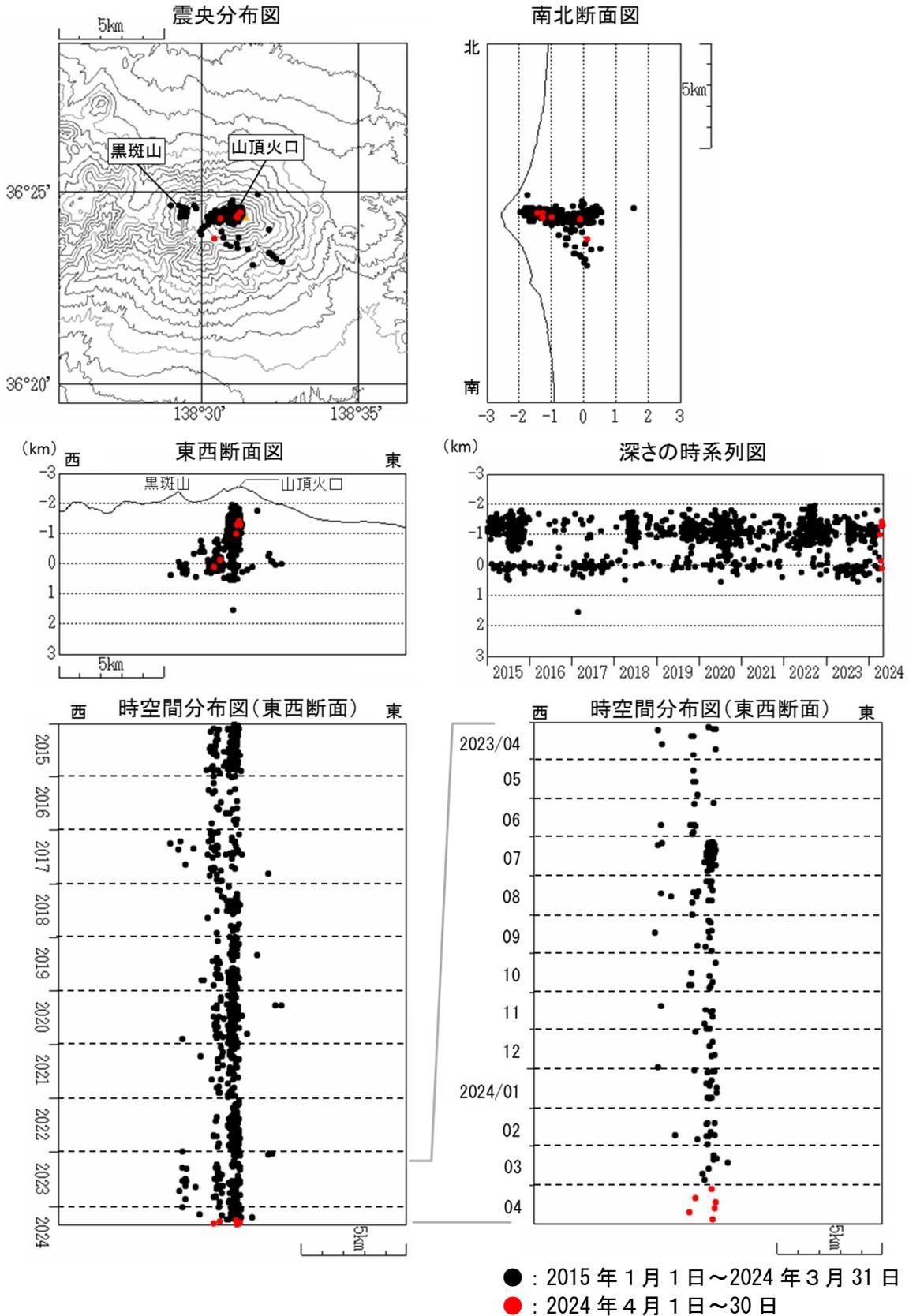


図6 浅間山 震源分布図 (2015年1月1日～2024年4月30日)

・火山性地震の震源は、主に従来からみられている山頂直下の深さ-1km（海拔1km）付近および山頂のやや西側の深さ0km（海拔0km）に分布しました。

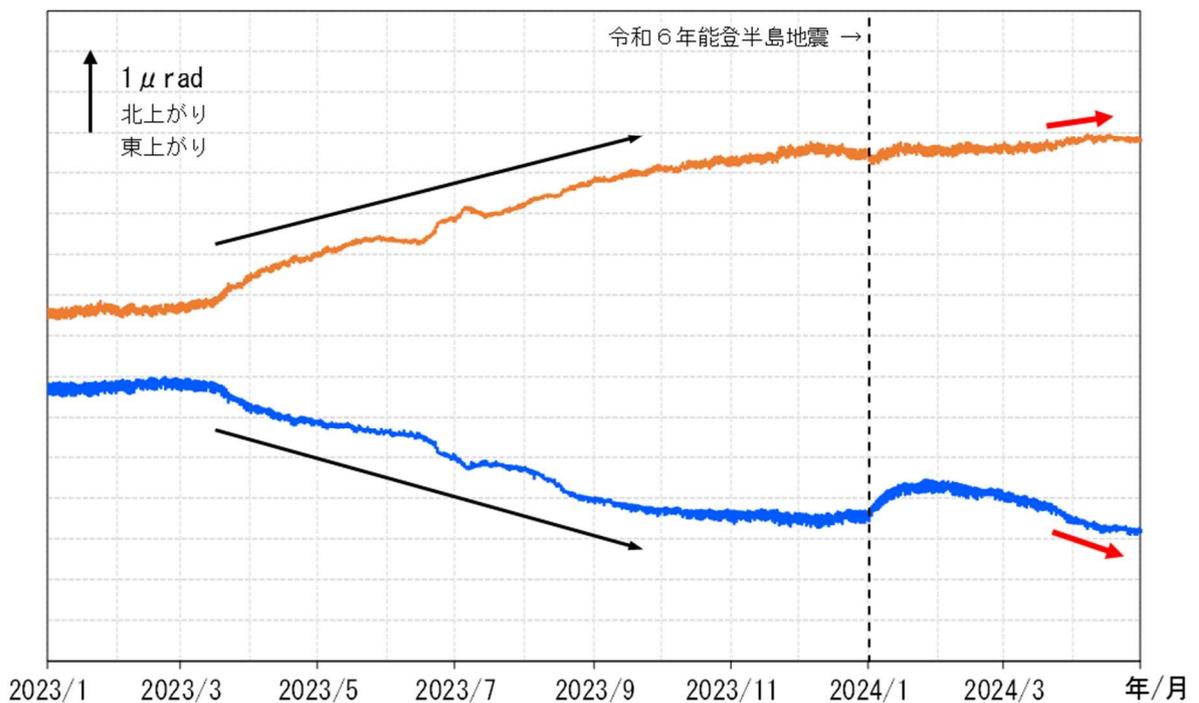
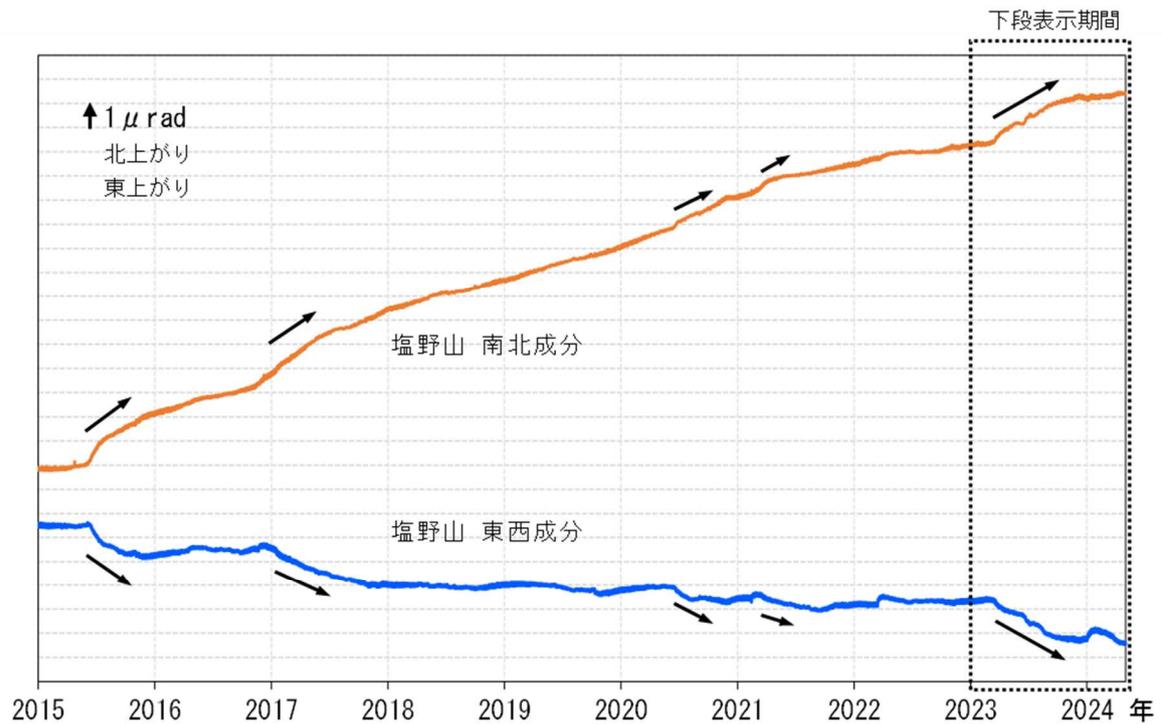


図7 浅間山 塩野山観測点における傾斜データ（2015年1月1日～2024年4月30日）

- ・2023年11月頃より停滞していた山体の西側での膨張を示すと考えられる傾斜変動が、3月中旬から再び認められています（赤矢印）。
- ・同観測点では過去にも同様の傾斜変動がみられていました（黒矢印）。これらは浅間山西麓の地下でのマグマの蓄積を示す変化と考えられています。

データは時間平均値を使用しており、長期にわたるトレンドを補正しています。  
下段は上段よりも縦軸を拡大しています。また、東西成分をシフトさせて表示しています。

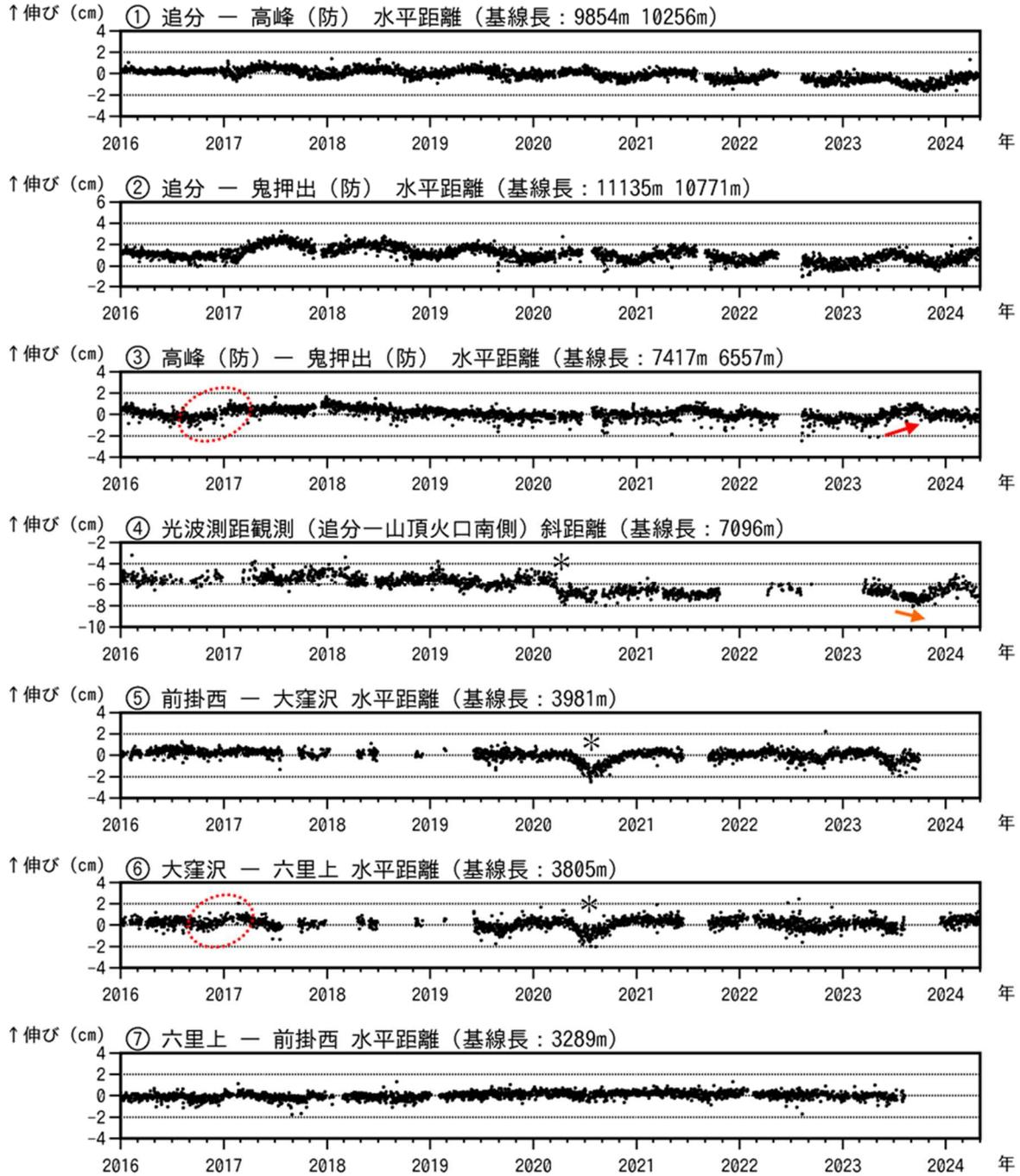


図8-1 浅間山 GNSS 連続観測及び光波測距観測結果(2016年1月1日~2024年4月30日)

- ・GNSS 連続観測では、一部の基線でわずかな伸びがみられていましたが(③赤矢印)、2023年11月頃から停滞しています。過去には、山体の西側を挟む基線などでわずかな伸びがみられました(③⑥赤破線)。これらは浅間山西麓の地下でのマグマの蓄積を示すと考えられています。
- ・光波測距観測では、2023年7月初め頃から9月下旬頃にかけて山頂と追分の間でわずかな縮みの傾向がみられました(④橙矢印)。これは、山頂部のごく浅いところの膨張によるものである可能性があります。今期間、特段の変化は認められませんでした。

（前ページ 図8-1の説明）

（防）：国立研究開発法人防災科学技術研究所

①～⑦は図9の①～⑦にそれぞれ対応しています。空白部分は欠測を示します。

①② 追分観測点は、2016年12月に移設しており、その後、基線長に年周変化がみられています。

④ \*の変動の原因は不明ですが、火山活動によるものではないと考えられます。

⑤⑥ \*の変動は大窪沢観測点の固有の変動であり、火山活動によるものではないと考えられます。

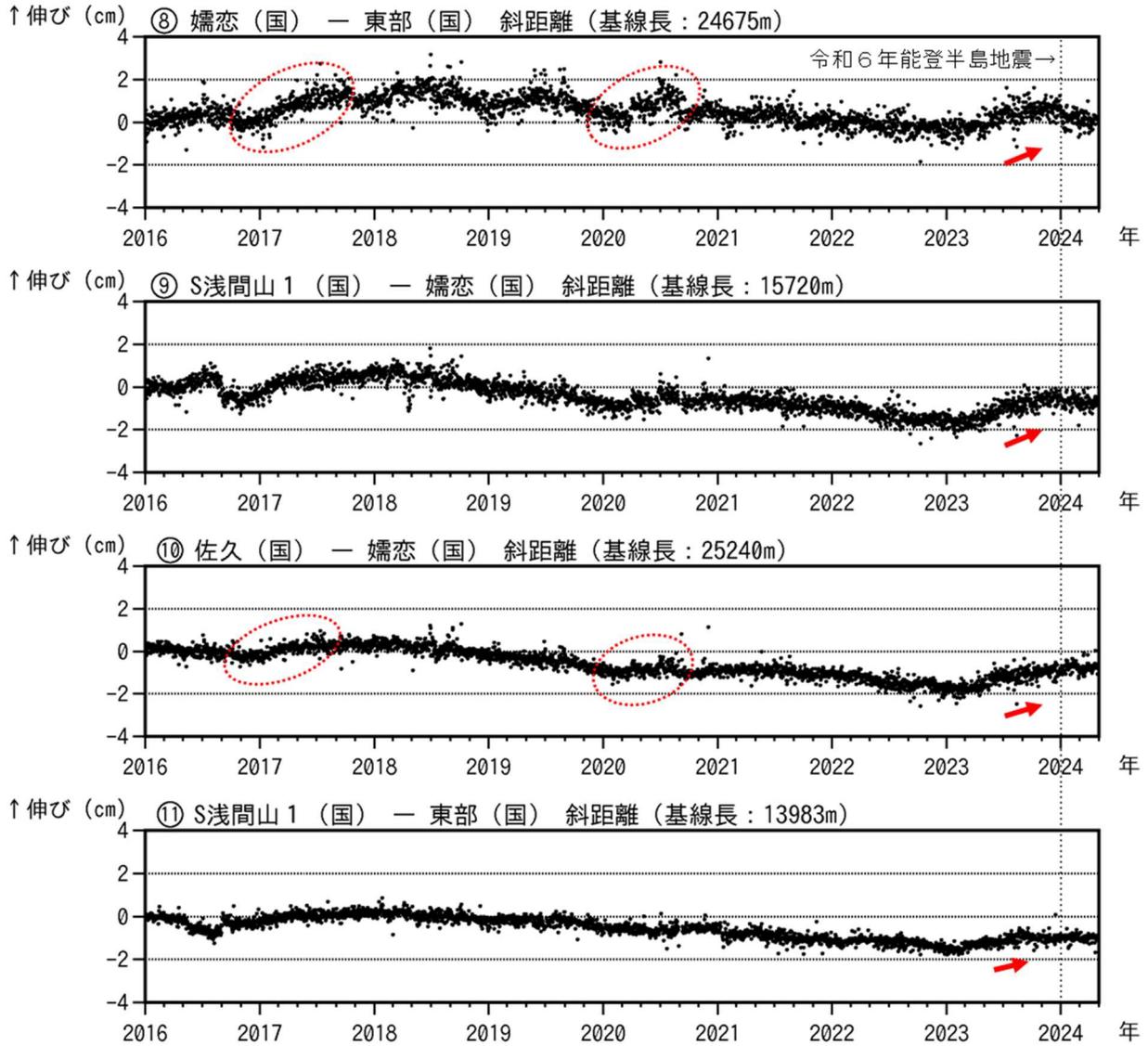


図8-2 浅間山 GNSS 連続観測結果(2016年1月1日～2024年4月30日)

- ・GNSS 連続観測では、一部の基線でわずかな伸びがみられていましたが（赤矢印）、2023年11月頃から停滞しています。
- ・過去には、山体の西側を挟む基線などでわずかな伸びがみられました（⑧⑩赤破線）。これらは浅間山西麓の地下でのマグマの蓄積を示すと考えられています。

⑧⑨⑩⑪は図9の⑧⑨⑩⑪にそれぞれ対応しています。空白部分は欠測を示します。（国）：国土地理院

